



# 100年前のひなまつり

## 安藤家で横沢ひなと出会う



上今井 五味家資料

土蔵の中に収納されていた木箱の中から、横沢ひなを含む添え雛 27 体を発見！雛が入っていた木箱には、全体に柿渋を塗った和紙が表面に貼られ、箱側面に年代と富士山の絵が描かれていました。

お待ちしています



七福神の一人、大黒天じゅ



後ろ髪は紙なの

童子は横沢ひなの代表なんだ！



横沢ひなの仲間たち



美人で和歌の神様「玉津島明神」



赤髪の癒癒よけの神「狸々」しゅうじゅう

### ひな人形の世界

あなたの思い出のひなまつりには、どんなお人形たちが飾られていましたか？

男雛と女雛が最上段に鎮座し、その下段に三人官女や五人囃子が並ぶ、いわゆる七段飾りを思い浮かべる方が多いのではないのでしょうか。このような七段飾りの販売は、大正時代に東京の大手百貨店などで、人形と調度類が飾り方の見本図と共にセット売りされたのがはじまりです。それ以前は、対で購入する男雛と女雛以外は、個々に買い集めたり親戚から贈られた、さまざまなきやカタケのお人形（添え雛）や飾り物を、家ごとに位置や数も自由に飾っていました。

ひなまつりは宮中で行なわれていた上巳の節句が、町家を中心に行なわれるようになった江戸時代、幕府による参勤交代で地方に伝わるとされます。地方でも行なわれるようになったひなまつりは、各地の風土や民俗と結びついて、独自のひな飾りを発展させました。甲府にも江戸時代に四軒の雛問屋が存在し、「江戸他国物」と「地細工物」の両方を販売していました。江戸や他地方の流行を取り入れつつも、独自のひな人形の世界が、かつての甲州に展開していたのです。安藤家で横沢ひなと出会う

「安藤家住宅ひなまつり」では、最上段に飾られた立派な古今雛や御殿飾り雛の下段に、現在ではあまり見かけることのない不思議な人形たちが、元氣いっぱいにはげさまをお迎えしています。

その不思議な人形とは「横沢ひな」とよばれる明治大正期に甲府の雛問屋が製作し、当時の山梨県民に広く親しまれた添え雛たちです。「横沢」という名は雛問屋があった地名「甲府市旧横澤町」に由来します。かつての南アルプス市域でも、この横沢ひなの入ったつづらを担いだ売り子が、「ひなさんどう、ひなさんどう」と大声をあけて売り歩きました。

安藤家では、できるならば雛段の前に膝をついて、下段に置かれた横沢ひなをより近く感じたいと願うことをおすすすめします。いかにも快活な人形たちの一群が座ったままジャンとすまし顔の高貴な雛たちの下で、異彩を放っています。よく見ると、衣裳素材の一部が紙

であるなど、質素なものでありますが、個々に異なる躍動感あふれる振り付けがたいへん面白く魅力的なお人形たちなのです。

### 横沢ひなと対話する

ふるさと〇〇博物館（文化財課）では、平成30年に榊形地区の2軒のお宅から横沢ひなを寄贈いただきました。それらの最新の分析と、これまでの調査を合わせて概観すると、横沢ひなのモチーフには10種類以上の豊富なバリエーションがありますが、その中でも多数を占めるのは童子の人形であることがわかりました。横沢ひなの中でも、雄びやかな世界に住む人物ではなく、のびのびとくすくすと育つ子どもの人形を、ふるさとのお人形たちは愛し、好んで多数購入したということがあります。

横沢ひなの代表的なモチーフである童子の人形の魅力はとにかく健康美。ふっくらとした丸顔に、赤く染まった頬、愛らしく大きく見開いた目と、いまにも歌や笑い声がこぼれてきそうなお元が印象的です。手足の振り付けも朗らかな子どもをイメージさせ、見ているだけで元気をもらえそうな感じがします。昔も今も変わらない、幼子に対する親や親族の本質的な願いが、時を超えて伝わってくるようです。

皆さんもぜひ、百年前のふるさとに住む人々が愛した雛「横沢ひな」への対話を安藤家住宅で楽しんでみてはいかがでしょうか。文／写真 文化財課

安藤家住宅ひなまつり

開催中～4月8日（月）まで 9時～16時半 ※火曜日休館